

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01482

研究課題名（和文）冷戦期の東欧における社会主義体制の比較研究：権威主義の強靱性を解明するために

研究課題名（英文）A Comparative Study of Socialist Regimes in Eastern Europe during the Cold War

研究代表者

福田 宏（FUKUDA, HIROSHI）

成城大学・法学部・准教授

研究者番号：60312336

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、旧東欧諸国を専門とする計6名による共同研究により、後期社会主義期における権威主義体制の強靱性を検討した。2010年代の半ば頃より民主主義の「後退」や権威主義体制の「しぶとさ」が盛んに議論されるようになってきていることに鑑み、この地域における非民主的体制が1989年まで持続した背景について、狭い意味での政治だけでなく、社会や文化の領域にも対象を広げる形で比較研究を実施した。コロナ禍により現地調査ができない時期があったため研究期間を1年延長したが、相応の研究成果を収めることができたと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小規模科研を6人で分担する形であったため、それぞれが基礎を積み上げていくことを最優先し、全体として大きな成果を出すという方式は採らなかった。個々の実績については別紙を参照して頂きたいが、共通の成果としては、2023年度にオーストリアの研究者フィリップ・テア（Philipp Ther）氏を招いて国際研究集会（ワークショップ）を実施したこと、また、彼の主著（Die neue Ordnung auf dem alten Kontinent, 2016）の翻訳を行ったこと（実際の出版は2024年度）などが挙げられる。

研究成果の概要（英文）： In this project, a total of six researchers specialising in the countries of the former Eastern Europe examined the resilience of authoritarian regimes in the late socialism. Regarding that the "backlash" of democracy or the "resilience" of authoritarian regimes have been actively discussed since the mid-2010s, we have focused on the background of the persistence of non-democratic regimes in the region until 1989, not only in the narrow sense of politics, but also in the social and cultural sphere. Although the research period was extended by one year due to the pandemic, which prevented field research at times, we believe that we were able to achieve a good number of research results.

研究分野：中東欧の政治と近現代史

キーワード：後期社会主義 東欧 新自由主義 チェコとスロヴァキア 東ドイツ ポーランド ハンガリー ユーゴスラヴィア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

2010年代の半ば頃より、民主主義の「後退」や権威主義体制の「しぶとさ」が盛んに議論されるようになった(一例として、ヤシャ・モンク(吉田徹訳)『民主主義を救え!』岩波書店、2019)。例えば、現在のハンガリーやポーランド等におけるポピュリズムの台頭を鑑みると、「東欧革命」とは一体何であったのかについて改めて考えさせられる。ハンガリー動乱やポーランドの連帯に対する弾圧などを経て、旧東欧諸国では1989年に民主化が実現したはずであり、一連の体制転換は市民社会が開花した結果とも捉えられた。だが、元学生運動のリーダーであり、民主化後のハンガリーで一貫して政治家として活躍してきたオルバーンは、今ではポピュリストとして世界的にも有名な(或いは悪名高い)首相である。オルバーンのような政治家が誕生した理由については、まずは体制転換以降の経緯について再検証が必要だが、社会主義期からの連続性についても併せて検討する必要がある。

2. 研究の目的

以上の点を踏まえたうえで、本研究においては、1989年以降との連続性を意識しつつ、社会主義期における権威主義体制の強靱性を明らかにすることを目的とした。

例えば、思想史の立場から20世紀のヨーロッパを俯瞰したヤン＝ヴェルナー・ミュラーの好著『試される民主主義』(板橋拓己ほか監訳、岩波書店、2019)は、民主主義を实践するうえでの思想的格闘が網羅的に論じられているが、社会主義期の旧東欧については異論派の思想が半ば理想化された形で扱われており、分析としては表層的である。彼は『ポピュリズムとは何か』(板橋訳、岩波書店、2017)においてポーランドとハンガリーのポピュリズムを極めて批判的に扱っているが、オルバーンに象徴される社会主義末期と現在とのギャップについては説明していない。

もちろん、コトキンのように社会主義期の異論派を批判的に論じた研究は存在する(S. Kotkin, *Uncivil Society: 1989 and the Implosion of the Communist Establishment*, Modern Library, 2009)。彼によれば、中東欧諸国の旧体制は異論派の努力によって崩壊したのではなく、単に政権が自壊しただけなのであった。彼の挑発的とも言える議論は、異論派の脱神話化を図るという点で画期的であったが、かといって、現在に至るまで一貫して市民社会が不在であったと考えるのも極端に過ぎるように思われる。本研究においては、現在との連続/非連続を踏まえたうえで社会主義期に着目した。

3. 研究の方法

本研究では、中東欧各国それぞれの専門家5名にご協力をいただき、計6名による共同研究の方式を採用した。中東欧諸国は言語障壁が大きいと、一人で多数の国を調査対象とすることは難しい。その点は、当該地域やその他の欧米諸国においても同様であり、社会主義期についても共同研究の形で成果が刊行されるケースが多い。日本においては、東欧史研究会やロシア・東欧学会などを中心とするネットワークが既に確立しているものの、社会主義期を研究対象とする者が相対的に少なく、国や言語の相違を越えた形でのネットワークは未だ不十分である。また、政治学と歴史学については比較的交流があるものの、社会学や人類学との接点、東独研究者と他の中東欧研究者との接点はこれまであまりなかったように思われる。

本研究では、計6名のチームにより、5カ国に関し3つのサブ・テーマについて分析を行った。具体的には以下の表のとおりである。

サブ・テーマ	担当者と対象国
A) 余暇と娯楽	福田(チェコスロヴァキア)・河合(東ドイツ)
B) カトリック教会	加藤(ポーランド)
C) ノスタルジーと記憶	菅原(ポーランド)・姉川(ハンガリー)・門間(ユーゴスラヴィア)

まず、福田と河合が余暇と娯楽を担当した。例えば、1960年代に急速に普及したテレビは、東側ブロックにおいて体制維持の道具として認識されていた。最近の研究によれば、日本語でいう所謂ゴールデンアワーに娯楽番組を提供することが、当局にとっての重要な政治的課題となっていた。場合によっては、西側放送の視聴の黙認すら体制の安定化に寄与すると考えられた。ここでは、余暇と娯楽(例えばロック音楽)が如何にして提供され、それがどのような形で国民の日常生活を構成していたのかを検討した。

次に、加藤がポーランドのカトリック教会を扱った。同国は、ソ連・東欧諸国のなかで例外的に教会が強固な地盤を維持し続けた場所である。言うまでもなく、社会主義体制にとって教会は歓迎されざる組織であり、国民にとっての抵抗の足場にもなりうる存在だった。ここでは、こうした教会の両義的な側面を意識しつつ、宗教の政治的機能について検討した。

社会主義期に対するノスタルジーと記憶は、当時と現在の連続性/非連続性を抽出するうえで極めて大きな重要性を持っている。民主主義の「後退」を象徴する存在となってしまっているポーランドとハンガリーについて、菅原が前者、姉川が後者を担当し、体制転換後におけるノスタルジーと記憶の変容を検討した。また、国家そのものが解体し、EU加盟などにおいて対照的な道歩んでいる旧ユーゴスラヴィア諸国に関しては、門間が担当した。

4. 研究成果

合計6名のチームによって遂行する本研究は、本来的には基盤(C)ではなく基盤(B)程度の規模で行うべきと考えられるが、代表者自身が複数のプロジェクトを抱えていたため、やむなく規模の小さい基盤(C)にて実施した。だが、(申請書においても記したように)各メンバーは確固たる研究基盤を有する研究者であり、巨額の資金を必要としているわけではない。むしろ我々にとって必要なのは持続的な資金である。言うまでもなく昨今の研究環境は厳しくなる一方であるが、最低限であっても安定的な研究環境さえ確保できれば、継続的にアウトプットを行うことは可能である。具体的には、次頁以降の業績一覧を参照して頂きたいが、数値としては、4年間の研究期間において、雑誌論文8件(内、査読付き論文1件)、学会発表18件(内、招待講演6件;内、国際学会1件)、図書10件(分担執筆を含む)である。

小規模科研であったため、全体として大きな成果を出すという方針は採らなかったが、科研最終年度(2023年度)において、オーストリアの研究者フィリップ・テア(Philipp Ther)氏を招いての国際研究集会(ワークショップ)「東欧の体制転換と新自由主義:1989年以降のヨーロッパ」を、現代史研究会、東欧史研究会、成城大学研究機構グローバル研究センター、成城大学特別研究助成「冷戦後期の東西ヨーロッパにおける「新基調」の政治:旧東欧の文化現象からのアプローチ」(代表:福田)の共催により開催した。また、同氏の主著(*Die neue Ordnung auf dem alten Kontinent*, 2016)の翻訳(福田・河合の監訳)を並行して実施した(実際の出版は2024年度)。

コロナ禍により現地調査ができない時期があったため研究期間を当初の予定より1年間延長することになったものの、上記に示すとおり、概ね計画通りの成果を出すことができたものと考えている。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 加藤久子	4. 巻 45号
2. 論文標題 社会主義期ポーランドにおける人間形成：「宗教」と「世俗」のはざままで	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『東欧史研究』	6. 最初と最後の頁 70-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河合信晴	4. 巻 45号
2. 論文標題 ソ連型社会主義体制における新しい人間像	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『東欧史研究』	6. 最初と最後の頁 95-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅原祥	4. 巻 25号
2. 論文標題 「ビョトル・シュルキンの デストピア四部作 : 外部への脱出を求めて」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『スラヴ学論集』	6. 最初と最後の頁 49-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田宏	4. 巻 2022-1
2. 論文標題 [書評] 塩川伸明『国家の解体：ベレストロイカとソ連の最期』（東京大学出版会、2021年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『年報政治学』	6. 最初と最後の頁 424-427
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅原祥	4. 巻 55号
2. 論文標題 「収容所の過去を再解釈するということ：『バサジェルカ』映画版と小説版をめぐって」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『京都産業大学論集 人文科学系列』	6. 最初と最後の頁 91-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 門間卓也	4. 巻 44号
2. 論文標題 書評：河合信晴著『物語 東ドイツの歴史：分断国家の挑戦と挫折』（中公新書、2020年）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『東欧史研究』	6. 最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原祥	4. 巻 54号
2. 論文標題 「産炭地をめぐる記憶と表象：ポーランドの炭鉱住宅ニキショヴィエツとギショヴィエツをめぐって」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『京都産業大学論集 人文科学系列』	6. 最初と最後の頁 75-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 福田宏	4. 巻 269号
2. 論文標題 【書評】剣持久木編『越境する歴史認識：ヨーロッパにおける「公共史」の試み』（岩波書店、2018年）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『西洋史学』	6. 最初と最後の頁 107-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 福田宏
2. 発表標題 「正常化」期のチェコスロヴァキアにおける「脱イデオロギー化」とロック音楽の持つ政治的位相の変容
3. 学会等名 国際政治学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤久子
2. 発表標題 ポーランドにおける価値の政治：人工妊娠中絶の政治争点化を中心に
3. 学会等名 政治学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 団地ドラマはユートピアの夢を見るか？：ポーランドのコメディ・ドラマ『オルタナティブ4』を中心に
3. 学会等名 岡山大学文学部プロジェクト研究「イメージの人文学」「各国映像メディアにおける団地表象の比較研究」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 加藤久子
2. 発表標題 戦場化するウクライナと東欧社会
3. 学会等名 大和大学社会学部・緊急公開シンポジウム「いま、ウクライナ情勢を考える」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤久子
2. 発表標題 社会主義期ポーランドにおける人間形成：「宗教」と「世俗」のはざままで
3. 学会等名 東欧史研究会小シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河合信晴
2. 発表標題 コメント：ソ連型社会主義体制における新しい人間像：共通性と相違点
3. 学会等名 東欧史研究会小シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroshi FUKUDA
2. 発表標題 "Richard Coudenhove-Kalergi and his sympathy with fascism: a negative side of the Pan-European movement during the interwar period"
3. 学会等名 ICCEES (International Council of Central and East European Studies), Montreal/ Zoom (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 「炭鉱経験を再考する：ポーランド、カトヴィツェ郊外のアマチュア画家グループの考察から」
3. 学会等名 日本ロシア文学会・日本スラヴ学研究会共催シンポジウム「記憶と創造の中の祖国・歴史・越境：ロシア・東欧における文化と変容」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 「社会主義時代のポーランドの SF 映画：P. シュルキンの デストピア四部作 を中心に」
3. 学会等名 日本スラヴ学研究会オンライン・シンポジウム「スラヴ世界の SF：K. チャベック『ロボット』初演 100 周年によせて」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 「自然としてのポタ山：ポーランド、シロンスク地域におけるその意味づけ」
3. 学会等名 2021年度日本スラヴ学研究会研究発表会（パネル発表「鉱山の光景」）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 河合信晴
2. 発表標題 「東ドイツの住宅問題（1979～89年）と社会国家性」
3. 学会等名 現代史研究会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門間卓也
2. 発表標題 書評報告：人道支援を巡る普遍主義とグローバル化の距離：タラ・ザーラ（三時眞貴子・北村陽子監訳 / 岩下誠・江口布由子訳）『失われた子どもたち 第二次世界大戦後のヨーロッパの家族再建』（みすず書房、2019年）
3. 学会等名 比較教育社会史研究会2021年秋季例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田宏
2. 発表標題 書評報告：大津留厚編『「民族自決」という幻影：ハプスブルク帝国の崩壊と新生諸国家の成立』（昭和堂、2020年）
3. 学会等名 東欧史研究会・ハプスブルク氏研究会合同報告会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原祥
2. 発表標題 「ポーランドにおける炭鉱経験の表象：カトヴィツェ市周辺の炭鉱住宅をめぐる」
3. 学会等名 2020年度東欧史研究会2月例会（関西例会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河合信晴
2. 発表標題 シンポジウム ドイツ統一30年 拙著『物語 東ドイツの歴史 分断国家の挑戦と挫折』（中央公論新社、2020年）執筆の背景
3. 学会等名 ドイツ現代史研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 河合信晴
2. 発表標題 小シンポ 「東ドイツ通史の現状と課題：日本で東ドイツを語る意義とは ウルリヒ・メーラート（伊豆田俊輔訳）『東ドイツ史 1945～1990』（白水社、2019年）、河合信晴『物語 東ドイツの歴史 分断国家の挑戦と挫折』（中央公論新社、2020年）によせて」
3. 学会等名 西ドイツ現代史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門間卓也
2. 発表標題 書評報告 / 河合信晴著『物語 東ドイツの歴史 分断国家の挑戦と挫折』（中公新書、2020年）
3. 学会等名 東欧史研究会例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 福田宏
2. 発表標題 「中・東欧と中国の「一帯一路」：チェコ上院議長の台湾訪問から考える」
3. 学会等名 経団連21世紀政策研究所・中国研究会（世界秩序班）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 姉川雄大	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 2
3. 書名 「ハンガリー王国」川成洋、菊池良生、佐竹謙一編『ハプスブルク事典』	

1. 著者名 福田宏	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 1
3. 書名 〔コラム〕「ロックは権力に「飼い慣らされた」のか」半澤朝彦編『政治と音楽：国際関係を動かす“ソフトパワー”』	

1. 著者名 加藤久子「ポーランド人と アウシュヴィッツ の近くて遠い距離」	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 13
3. 書名 加藤有子編『ホロコーストとヒロシマ：ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶』208-220頁	

1. 著者名 福田宏「スメタナ」「プラハとクトナー・ホラ（世界遺産）」「スロヴァキアの歴史認識・教科書問題」	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 6
3. 書名 中欧・東欧文化事典編集委員会編『中欧・東欧文化事典』96-97、278-279、716-717頁	

1. 著者名 加藤久子「ヨハネ・パウロ2世とポーランドのカトリック」「ポーランドの教会」「ポーランドの博物館・美術館」	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 6
3. 書名 中欧・東欧文化事典編集委員会編『中欧・東欧文化事典』138-139、244-247頁	

1. 著者名 福田 宏・後藤 絵美編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 244
3. 書名 『「みえない関係性」をみせる』福田担当分は序章（1-23頁）	

1. 著者名 河合 信晴	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 304
3. 書名 『物語 東ドイツの歴史』単著	

1. 著者名 木村 至聖・森久 聡ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 216
3. 書名 『社会学で読み解く文化遺産』（菅原および加藤は共著者）	

1. 著者名 伊達 聖伸ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 『ヨーロッパの世俗と宗教』（加藤は共著者）	

1. 著者名 渡辺 克義ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 432
3. 書名 『ポーランドの歴史を知るための55章』（加藤は共著者）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	姉川 雄大 (ANEGAWA Yudai) (00554304)	長崎大学・多文化社会学部・准教授 (17301)	
研究分担者	河合 信晴 (KAWAI Nobuharu) (20720428)	広島大学・人間社会科学研究科(総)・准教授 (15401)	
研究分担者	菅原 祥 (SUGAWARA Sho) (80739409)	京都産業大学・現代社会学部・准教授 (34304)	
研究分担者	門間 卓也 (MOMMA Takuya) (90868291)	愛知学院大学・文学部・准教授 (33902)	
研究分担者	加藤 久子 (KATO Hisako) (10646285)	大和大学・社会学部・教授 (34453)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 東欧の体制転換と新自由主義	1989年以降のヨーロッパ	開催年 2023年～2023年
-------------------------	---------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------